

令和6年度 第2回湧別町ゼロカーボン推進協議会 会議録

開催日時	令和6年10月7日（月） 14時00分 開会 15時50分 閉会
開催場所	上湧別コミュニティセンター 2階大会議室
出席委員等	刈田・清水・平田・長屋・奥村・小幡・藤本・北村・三瓶・安達・今各委員、落合北海道大学特任助教（オブザーバー）
欠席委員等	三橋・毛利・菅原各委員
事務局職員	パシフィックコンサルタンツ（株）雨嶋室長・森元課長・三塚主任（計画策定業務受託者） 企画財政課：井上課長、齊藤主査、佐藤主査
議題	<ol style="list-style-type: none"> 1. 開会 2. 会長挨拶 3. 議題 <ol style="list-style-type: none"> （1）地球温暖化対策実行計画策定業務の進捗状況について （2）アンケート調査（町民・事業者）結果について 4. その他 <ol style="list-style-type: none"> （1）次回協議会の開催について 5. 閉会
会議の公開	公開
傍聴人の数	0名
提出資料	・資料1：湧別町ゼロカーボン推進協議会進捗報告
会議録	<input checked="" type="checkbox"/> 有 （ <input type="checkbox"/> 全文筆記 <input checked="" type="checkbox"/> 要点筆記 ） <input type="checkbox"/> 無
その他	

1. 開会 井上課長
2. 会長挨拶 刈田町長
3. 議題

- (1) 地球温暖化対策実行計画策定業務の進捗状況について
パシフィックコンサルタンツ（株）より資料に基づき説明。

落合アドバイザー) 排出量をゼロにすることというのはやっぱりできない。できる限り我々生活の中で出てくるものをなるべくできる限り減らしていく努力を今から 2050 年、その先もあるけれどもしていきましょう、ということ。森林が吸収してくれるので相殺されてゼロというような考えで、最終的にゼロにするというようなストーリーである。こういうことをすることで少しでもビジネス姿が変わるとか、そういった視点で物事をプラスに捉えてもらってゼロになるだけではなく、いいことを生み出すというような視点で見ただけるといい。

刈田町長) 太陽光を今の状況でいくと、売電ではなくマイクログリッドで、地域内で使うのが一番いい。ただそう簡単なものじゃない。これを実現していくためには、何をやればいいのかという部分が非常にわからない。

落合アドバイザー) 太陽光パネルを入れることで発電する電気を売電することになるが、売電金額が下がっている中で、それでも売って、そして使用する分を買うというのが、基本的な仕組みが現状である。マイクログリッド化という発電した電気を自分たちで使うというような仕組みとし、そうすることで電力料金というものが高くなるか安くなるかというところは価格のバランスによるので何とも言えないが、自分のところで作れるので、例えばブラックアウトのような外の影響というのを受けなくなるというメリットを感じて、こういうのを入れる、というのが一つの道としてあると思う。自分ところの電気を自分ところで作るというところから、まず始めるのが一つ、その次のステップで、発電した電気を今の話したマイクログリッドでつないで地域の電力としてするというような考え方に立つのがいいと思う。メタン発酵などもこれも一つのエネルギー源地域が持っている資源から生まれるエネルギーだというふうに考えることもできるので、バイオマスと呼ばれているものからの発電、そういったところがまず身近で技術的にできることと思う。

委員) マイクログリッドを行うにしても電線に多額の費用がかかる。農業機械の電気化やスマート農業を導入するにあたってはそれなりの費用がかかる。

落合アドバイザー) こういった技術を導入するというのは当然、お金はかかる。できることから順番にやっていくことになると思うが、国の施策でもあるので、うまく国の補助を使いながら入れられるところから入れていくということが一つ。あとは銀行の力、環境に対する配慮をしていないと投資も集まらない

いというような状況になっている。そういったことを考えたときに、例えば環境に対する配慮はここまでできていないと、ちょっと投資は難しいというのが特に中央というか東京のほうの会社、大きい会社のほうになるほど、それはもう煽りを受けている。そういった意味でも国からの補助がまず一つ。そして銀行の融資という面でも、環境に対する何らかの対応、例えば太陽光パネル入れて環境に対して対応しているとかそういったところをよく考えて優先順位をつけて物事をやっていくしかないと思う。当然、費用対効果もあるので何でもかんでもやるわけにいかないで、優先順位をこういった会議の中でつける判断材料、最終的には補助金ですので、町の政策をつくっていくことになると思うが、こういった会議で皆さんの意見を集約することで、効果的な補助事業というのができるようになると思う。

委員) 先日アンケートに答えたが、なかなかゼロカーボンというのは実益を伴うものではないし、目に見えないものであるため、自分たちの町のこととか自分のこととして取り組むということが大事なことだと思う。ただ事業者からすると事業が前提になるので、やっぱり農業、酪農の人が節電だとかゼロカーボンを考えて積極的にはできない。ただ自分たち個人がやれるとしたら、やっぱり自動車のハイブリッドへの入れ替えだとか、給湯器の高性能のものを入れたり、そういうことをやらなくちゃいけないと思うが、どれだけ貢献できたかわからない。湧別町はここまで進んで、自分はこれとこれをしていないので、ちょっと遅れているなというような認識を持たせるような、町全体がゼロカーボンに向かってできるようなそういうアナウンスというか、そういう部分が大切なのではないか。

落合アドバイザー) 非常に大事な話だと思う。言われるとおりに見えるものではない。やっていることの結果であったり、それがどう影響を与えているか目に見えないことなので、モチベーションが上がらないし、やっている意味あるのかっていうのが、多分二言目で出てくる言葉だと思う。そういった意味でもまず機運を高めるというのは非常に大事なことだと思う。一番できるのは、例えば組織の中とか、会社からは町の職員の意識改革とか意識を上げるような活動、例えばそういった脱炭素って何だろうっていう勉強会が始まって自分ごとにするということのステップを踏んでいって、最後は自分ができることをマップ化する。それを最後、町であれば各部署が政策に落とし込む。落とし込めなくても、少なくともそういう過程というのは少しでもゼロカーボンに触れる時間になると、そういうのを企業それぞれがやっていく草の根運動と近いんですけど、そういうふうにして少しずつでも広めていくということが必要ではないか。やるのが当たり前になったら勝ちなんですけれども、そこに行くまでには本当に一朝一夕にはいかない。2050年に達成するのは望ましいが、2050年にこの町がなくなるわけではないし、ずっと日本や地域がなくならな

いので、今後ずっとそれを続けていくような、その第一歩がゼロカーボン推進協議会と思っている。いずれにせよ目に見えないものだからこそ、少しでも何が必要なのかとか少しでも広めていくような、そういう努力っていうのは行う必要があると思う。

刈田町長) 現実的に考えてしまう部分が多くて、家畜糞尿のバイオマスでは電気の系統連携の問題や、生活系では燃えるごみから生ごみだけで抜き出す労力っていうのはどうやるっていう部分もあるし、また下水汚泥をやると肥料法にちょっと引かかる部分もあり、結構制約があり計画に具体的に入れていいものなのかと。法律の問題とか、費用対効果の問題で進められないというのも出てくるがどうなのか。

雨嶋室長) この実行計画に記載したからやらないといけないという法制化とはならない。計画では全体としての目標を達成するものとなるが、進捗管理が必要になってくる。当初予定していたものはできなくなるとかいろんな事情があってできないってことで罰則があるというのではない。

落合アドバイザー) どちらかというところでは、この計画を策定したからといって、2050年達成、なかなか難しいというところだとしても、咎められるという話ではない。なぜかというところ、かなり難しい課題ということである。この脱炭素ということも、かなり無理な目標を立てるというふうに思っている。2050年までにゼロ、つまり、今出しているもの12ページをもう一回見ていただければわかりますけれど、15万トンというCO2をゼロにすると、じゃあどんな生活になるんだろうか、実際、それを本当に達成できるのかとか、誰もわからない。そういった意味でもこの計画ではこういうふうにしていきたいんだ、こういうふうにしていくつもりなのだというか、大きな方針というのを作るといのが、実行計画の本筋というか、目標というふうに捉えたほうがいいと考えている。バイオガスプラントを建てて、それにより脱炭素に向かっていくんだ、というものの考え自体は悪くないと思う。ただそれは実行可能かどうかという話になってくる。バイオマスを導入して発電するとそれを系統に流すときには系統の制約があるはずで、そうすると作ったけれども、それは採算取れないという話になるし、じゃあ、それこそ自分のところで使いましょうというような考え方になって、現実的にこれが可能かどうかというところを見据えながらこの計画を作っていくのが理想ではあるが、大きな方針としてバイオガスプラントっていうのもいいんじゃないかとか、こういうのを作ったらいいんじゃないかというようなアイデア出しをして、そこから制約条件を明らかにしていくっていうのが、発展的というか、前向きになるかな、というふう思っている。また生ごみもなかなか難しい。この町では生ごみとかを分けて何かしようとした過去があるのか。

刈田町長) 昔合併前に補助金出してコンポストだとか、生ゴミ処理機の助成はや

ったことがある。

委員) 上湧別の時は平成 12 年か 13 年くらいに国と町の助成を受けて堆肥所を作りそこに生ごみを一緒に処理できないかというので行ったが、生ごみ専用の機械じゃないし、生ごみだけではなくいろんなものが入っていてとてもじゃないけど、機械でやるときにいろいろ不具合があって 1 年弱くらいでやめた経過がある。

落合アドバイザー) 分かりました。そういった経緯を踏まえるとやっぱりすぐにはできない。どれができるかというところをみんなで考えませんかという会議だと思っている。下水汚泥も使いたい、なかなか難しい。どれがいいのか、どれをどう使っていくのがいいのかっていうのは、今ここでポテンシャルという意味で、これも使えるあれも使えるんじゃないかというのをを出していただいたところだと思う。あとは、例えば皆さんの近くに今こういう困りごとがあって、それとゼロカーボンで結びつけられているようなアイデアを皆さんここで話していくと、もしかしたら町らしいとか、自分の地域らしい脱炭素の施策につながっていく可能性がある。最初にお金の話があったと思うが、言われるとおりにお金は大事。今、手元にお金がなくても将来的には何かできるんじゃないかというような視点に立ったときに、こういうのはどうだろうかというアイデアで、そのところから話ができるのが必要だと思う。そのあと、コストに関しては重々考えた上で、これはちょっとやっぱり無理だとか、もしかしたら時代とともにコストが見合う可能性も出てくるかもしれないので、そういったことをまず前段として、今こういう取り組みをしているんだけど、これっていいんだろうとか、これと脱炭素絡めないかとか、こういうこと困ってるんだけど、何か絡めないかとかっていうのを皆さんと話し合うと、何か面白いんじゃないかな、とか、何か出てくるんじゃないかなと思いましたが、何か出てきたらいいかなと思う。

委員) 目的は温室効果ガスの排出をゼロにするということ。それをするとすると化石燃料を使わないというのが一番である。化石燃料を使わないために、少しずつ太陽光に変えたり何かといろいろやりながらという話です。そして、再生可能エネルギーを徐々に増やしていくという形でなっているのですが、ソーラー発電もやっているのですが、先ほど発電とか言われていましたけど、国もそれを推奨してソーラー発電をしましょうっていう形でやったのですが、最初の売電が 46 円くらいだったのです。それが今うちで新たにやるとなると 15~16 円。半分以下となっている。国でやれやれって言っていたけど、そんなに低くして、誰もやらなくなりますよねって、今ほとんど下火になったのですよね。そういう形でやって国がやはり 50 年まで脱炭素だって言っている割になんで下げるのですかって。電力の規制緩和もだんだんなくなってきて、最初はこうですっていうのがやっぱりやめますって言って、やっぱり北電

がメインの発電施設という形になっていますから。ちょっとそれで考えたのがいろいろな業界で取組みをやっているのですよね。専門でないいろんな分野で言ってもあまり広すぎるので、うちで企業としてどれができるのかと、太陽光とか電気をLEDにしましょうとか、電気をこまめに消しましょうとか、そういうのは企業ではやっている。それを企業がやって、あとは地域の人はどうするか、個々で考えていかないと。ゼロカーボンはそんな簡単なものじゃないと思う。EVと言っている割に欧州の方も今、ハイブリッドとかに変わってきていますよね。それってなんでって話になってきているので、そこら辺はまた地域、企業で一回考えないと、私は農業の方がどうだというのは一切わからないので、いろいろな業界でも国とかいろんな会合をやっていますので、そこからいかないとちょっと無理があると考えていたのですが、それらの資料を見ながら、家にソーラー発電は付けましょう、EVに全部しましょう、というのは楽なのですよね。だけど、どこから補助金が出るのかお金が出るのかという話になったら、なかなかそこまでいかないような状態になっている。脱炭素のこともそうだが、今本当に1番の問題点は人手不足。これを解決しないと脱炭素なんて今言っているレベルじゃない。そういうのも含めて、その人手不足を解消するのに機械があって、やっぱり機械化すると便利になりますよねっていう形でなっているから、これをやっぱりちょっと皆さんで考えていただいて、個々で一回考えてその業界ではこうしましょうっていう案でいかないと、ちょっと広すぎると思うのですよね。私はそう考えました。

落合アドバイザー) 皆さんの会社っていうか、会社でなくても周りでもいいですけど、ゼロカーボンというものに対する意識というか、そういう話題であったり、勉強会なり考える機会というのがあるのですか。

委員) 植樹をしたくらいです。会社じゃあ、どれだけCO2削減のために電力削減で残業を絶対7時以降にやらないとか、そこまでのレベル感はないですね。

委員) ゼロカーボンというまでは意識がいかないでしょう。まず、省エネとか、そういったところから例えば電気をLEDに変えたりとか、そういったところからこれが絡むものでちょっとずつって感じで、一般の職員とかまでゼロカーボって言葉自体があんまりよくわからないのだろうな、というのが現状です。

落合アドバイザー) 自分ごととして何ができるのだろう、何をやろうということまで、まずいかないと話にならない。当然今人手不足等、それよりも大事な課題があるのも重々承知している中で、ゼロカーボンというものに関して少しでも考える瞬間だったり、考える機会みたいなものを各企業とか団体だったり一回、そういう時間を設けるということ、普及啓発じゃないですが、少しでも全体の草の根でも少しでも意識の醸成というのが必要ですし、そこから始めないと何も動かないかなと思う。それしかできないと思う。実際にはそう

いったところを進めていく必要があるなど。やれることから、やれる範囲でやるべきじゃないかと思っている。業務ができなくなるほどゼロカーボンを考える必要は全くないし、それは本末転倒なので、今できることは何なのかという、このレベルから自分ごととして捉えるような機会を作る必要があると思う。そういうことから進めることがまず大事だと思う。そこに、町の施策が少しでも貢献できるのであれば、それが最初にやるべき施策であろうと考える。

刈田町長) 脱炭素ゼロカーボンの将来ビジョン、どうも資料的にもそうなのですが、発電とか再利用とかそういうふうに入っているの、どうしてもそういうものやっつけていかなきゃならん、という部分に見えちゃうけれども、基本的には、これSDGsと絡んでいるでしょうね。できるものとできないもの、行政としても今、街灯だとか街路灯だとか全部LEDに変えてきているし、室内灯もLEDに変え省エネに取り組むとか、できるものからやっつけていくという部分がありますし、森林だって不要のものを木質バイオマスに持っていくっていうのも一つですし、今ブルーカーボンの実証実験もやっっており、削れないなら新しいものを作りましょうという部分で、コンブの養殖だとかいろいろブルーカーボンも考えていかなければならないので、あくまでも発電に特化している部分が多いが、それ以外の部分でも、やっぱり取り入れていって、再利用する、何をするかによってそれも入っていくと思っている。できるもの、できないものというのを分けながら、この計画を作っっていくかと思っっている。

委員) あと25年ですよ。先ほども言われたように問題が大きすぎて機械の導入とかというのが多いような気がする。補助金の関係でいくと、他の地域の方々も同じことに取り組んでいるので、補助金の取り合いとなる。それならば湧別ではできることをやっつけていけばいいのかなと思ったりもしたし、連合会も農協が保有している森林の活用を始めてきた。この計画でいくとこれからまだいろんな意見が出ると思うが、機械の導入とかそういうのは多いのかなと。それでも多分無理ですよ。

雨嶋室長) 今後の重点事業みたいところで大きな設備導入だとかそういうことを特化してたくさん入れているので、意見が出るかと思っますし、そのとおりにだと思っしているところもあるのですけれども、すぐにできないものがすごく多いがこういう事業を2025年までやっっていくかと思っ、国のゼロカーボンも無理ではある。今後すぐにできないものを含めて、可能性のあるものをまず考へて入れていくっていうのが大事かなと思っている。その中で、すぐ手をつけられるのはまだ一部かもしれないが、すぐできるものから始めていくっていうのがまず重要で、事務所とか家庭でできる取り組みっていうのをちょっと一部だけ入っっていますけれども、みんながどれくらいやっつて、その中で自分がやっっていないからやらないといけないうとか、そういうものの一つの目安と

しては、こういうものを継続してまとめて皆さんに提示するのが大事だと思った。あと、ここに入れているものは、設備を導入するだけじゃなくて、皆さんが身近にやっていけるものっていうのもこれだけじゃなくてもっとたくさん整理して効果がどれぐらいなのかなっていうのを提示するべきなのかと。そういう中で先ほど藤本さんが言われたように建設業だったら実はこんなことやっているのだとか、ほかの農業漁業だったらこんなことやっているとか考えていることとか、ちょっと皆さんに話を伺って、現状や行っていること、まだやりたくてできてないこととか、そういうことを聞いた上で整理する必要があると思いましたので、直接伺い、いろいろ現状を教えてくださいたい。

刈田町長) 住宅の断熱について、北海道の住宅は断熱している気がするが、100パーセントに近いじゃないのか。

雨嶋室長) 老朽化したところをするとか、家庭でさらに断熱だけやるっていう補助を別の自治体が行った際に結構応募があったと聞いているので、できることがあると思った。

刈田町長) そういうところがシナリオとしては出てくると思っているし、そういうものを含めて何かを導入するとか、今できるものを少し増やしていかないと、現実的にこんな大きなものを入れられませんよ、という部分ですとか、太陽光は値段が安いので、逆に言ったら蓄電池を設置して自家消費をしていただく、というようなことを先導していくというような方法もあるのかなと思いますので、蓄電池の導入についても考えていきたいと思っている。この辺はこれからどんどん変わっていくのか。

雨嶋室長) 重点的に例示しているがまだ整理して追加していくものがあると思うし、まだ中間段階という仕様である。

刈田町長) 森林面積が結構あるので、森林を増やせば全部吸収できると思っているが。

落合アドバイザー) 他の団体で実際実現はしてないが、使っていない土地に成長の早いエリートツリーといった植物を植えることで今まで何もしていなかった土地に炭素の吸収源ができる。削減だけじゃなくて、そういったことも考えるのも大事な、というふうに思うので、ぜひ自分ごととして何ができるかっていうのを議論できるといい。

(2) アンケート調査(町民・事業者)結果について

落合アドバイザー) コストが比較的安く、手軽だという意味でLEDへの買い替えというところが一番高くなるということを見て現実的と思ったところである。また、企業の考え方としても、やはり環境問題に取り組む理由というのも納得できるし、やはり障害は手間、時間、費用。情勢が変わると結果も変わってくると思う。

刈田町長) 基本的には太陽光とバイオマスがアンケート結果から出ているが、太陽光が始まってから15年経過し買取価格が落ちた時にそれを継続して企業が行うのが問題としてある。

落合アドバイザー) 太陽光パネルを入れることが第一択で、考えないほうが良いと思う。やっぱり方法として、太陽光パネル、バイオマスプラント、木質バイオマス発電など、いろいろと技術はあると思うので、こういうことやって、地域のバイオマスとか地域の資源と合うんじゃないかっていう議論はすべきだと思う。一方でやっぱり自分ごととして何ができるのかっていうことのせつかくここに集まっているので、自分の企業、団体、自分の身の回りでもいいですけれども、何ができるのか、何から始められるのかとか、この考え方の中に入れ込むことでより実現性の高い計画になっていくと思うので、今後調査する中で整理され、現実を見た計画として最後に出来上がってくると思っている。

刈田町長) 高みを目指しすぎても現実的でないという部分があるし、個々で何ができるかという部分をとらえていかなければならないし、この計画を出す以上、将来にわたりどこまでできるのかという話になってくるので、将来を目指したものと現実的に今進めていこうという部分の仕分けをしていかないとならないと思っている。

4. その他

- (1) 次回協議会の開催について
令和6年11月下旬を予定